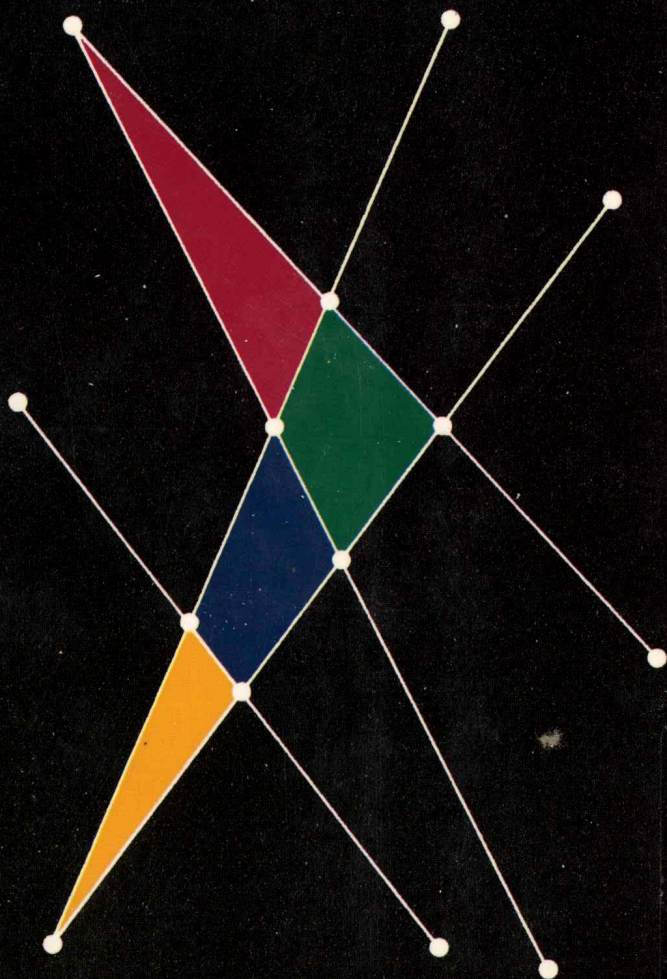


新編 私の中の流星群

死者への言葉

草野心平



筑摩叢書 352

新編 私のの中の流星群

死者への言葉

草野心平



1903年福島県いわき市生れ。磐城中学、
慶応普通部ともに中退後、1921年から中
国嶺南大学に学ぶ。宮沢賢治と八木重吉
をく発見)、また1935年同人誌「歷程」を
創刊。1987年文化勲章受章。1988年死去。
著書には『第百階級』(1928)、『定本蛙』
(1948 読売文学賞)、『富士山』(1943)、『原
音』(1977)を代表とする多くの詩集、『わ
が光太郎』(1970 読売文学賞)、『わが賢治』
(1970)、『村山槐多』(1976)などの評論・エ
ッセイ、『草野心平全集』全12巻(1978-84)
がある。

新編 私のの中の流星群 死者への言葉

筑摩叢書 352

1991年5月30日 初版第1刷発行

著者——草野心平

発行者——関根栄郷

発行所——株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前2-6-4

郵便番号 111-91

電話東京5687-2680(営業) 5687-2670(編集)

振替東京6-4123

印刷——明和印刷

製本——永興舎

ISBN4-480-01352-0 C0395 © Rai Kusano, Daisaku Kusano, Mankichi Kusano,
Midori Hirabayashi, Kōhei Kusano

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。
送料小社負担にてお取替致します。

新編 私の中の流星群

— 死者への言葉 —

宮沢賢治

「賢治からもらった手紙」

『わが賢治』というのを一本にまとめる用事があって、以前国会図書館の蔵書のなかから書きぬいてもらった私の一文「宮沢賢治覚書」一のA（文学界昭和十年三月号）に賢治からもらった手紙の断片が引用してあるので、それらや、その他について改めて回想したいと思う。（序でに述べればこの「一のA」というのは「一のB」を次に書く予定にしていたの「一のA」だったと思われるのだが、遂に「一のB」は書かれなかった。そして同年の「文学界」十月号に「宮沢賢治覚書二・春と修羅に就いて」が載っている由である。由であるというのは、同号は国会図書館にもなく、文春にも現物はなく、現在残っている目録によって分ったことである。）

私が賢治からはじめて手紙をもらったのは、私が賢治宛に書いた手紙への返事だった。

それは大正十四年（一九二五）七月、中国全土にひろがった排日英動乱（五・三〇事件）が広州に波及し沙基事件（別名六月二十三日事件）の流血の惨までもりあがり、自分のいた嶺南大学（現在の中山大学）では全外人の排斥運動が強烈に展開された。（この事件に就いては、昭和三十六年四月号の「新潮」にのった「動乱」というテーマの自分の中篇小説で相当詳しく述べている。）実

はその年の九月、シカゴ大学に留学する可能性が自分にはあった。というのは、アメリカ人の歴史学の教授ブラウネル氏から五月頃聞いた非公式の話だったが、そのことは多分、当時私が大学で日本語の講座を受持つていたことから、アメリカへ留学して学位をとり、再び母校に帰って日本語の講座を受持つようにとの好意からではなかったらうかと思う。しかしどうしてシカゴ大学ということになったのかは今になっても分らない。ただ漠然と分ることは、当時の嶺南大学はアメリカ資本によってまかなわれていたキリスト教系大学で、英国人やドイツ系の教授も二、三人いたが、殆どはアメリカ人の教授で中国人教授もアメリカ人教授よりはすくなかった。

嶺南大学とシカゴ大学とどんな関聯があったのかも実のところ分らない。シカゴというのは自分の記憶がいとも知れない。けれどもブラウネル氏から非公式ながら留学の話を書いたことは事実だ。私は当時も歴史は不得手で、だから学問的にブラウネル氏に好意をもたれる筈はなかったのだが、どういうわけか、時たま日曜の晩餐などによんでくれて家族の人々との、従ってつきあいみないなものもあった。ブラウネル氏は学校一と思われる瘠せた長身の人だったが、二人の子供たちも瘠せたせい高ノッポでよくふざけて遊んだりしていた。(賢治からもらった手紙のテーマが、まるで横道にそれてしまったが、この一文を書きだしたら、自分の青春時代や、解放後、中山大学と改名されてからの大学の様相——十四年？前に訪ねたときの、等がもうもう靄のように思い出されるので、「日本語講座」のところだけでもへいままであまり書いたことがなかったので道草したい気持ちになった。)

私が受持った日本語の講座はフランス語とドイツ語と単位は同格だった。週六時間、テキストは丸善から出ていた外人向けの日本語の会話の本。(日本の雑誌や新聞を貸してくれと希望するもの

もいた。全くの初歩でも、漢字が多いので意味を察するのは案外容易だったのかもしれない。

二十一歳、二十二歳の青二才の私にどうしてこんな大それた仕事がふりあてられたのか。第一私は学校での成績も上等の方ではなかったのだし、ホントのところ私自身日本語の文法などはチンプンカンプンだった。(そのことは学校側では知らなかった。)

ところでいま思いあたることを並べてみれば①日本人が私一人しかいなかったこと②学生なり学校側の要望があったこと、或いはドイツ語やフランス語の講座があつて、隣国の日本語がないのはバランスがとれない、片手落じやないかという意見でもでたのか③私が貧乏でアルバイト学生だったこと④その他、によつてのことではなかったらうか。ホントのところは分らないが、いまはそんな風に考えられる。

先生である私は上等の成績ではなかったが、日本語を習う生徒たちは、言わば秀才たちであつた。そんな秀才たちがどうして日本語を習おうとしたか、一言で言えば、敵意からではなかったらうか。そう言いきるのは粗雑すぎるが、習おうという根本心理には好意よりも敵意が強かったと見るのが本当のような気がする。二十一箇条以来、中国人、殊に中国人学生には日本に対する政治的反感が、その間に高低の波はあつても、持続的に高まっていた。日本人である私は本能的に祖国への愛はもっていたけれども、政治的には祖国への敵意に似た感情に燃えていた。日本人である私さえがそのような感情をもっていたのだから、中国人である彼等は当然、更に何倍かの熾烈さで抗日の感情をもっていたにちがいない、と断定することは、これも粗雑すぎるかもしれないが、そうした心理の傾斜が普遍していたことだけはたしかだと思える。では何故、敵意的感情をもちながら日本語を習おうとしたのだらうか。そこには日清、日露の日本の戦勝もあつたらう。どうして、またどのよう

にして、日本が清国に、ロシアに勝つことが出来たのか、大正時代の日本の経済と軍事力や文化の発展、その他その他、彼等が知りたいことは山々あったにちがいない。忍耐の状態に於て、日本を知ること、日本を知るためには、先ず日本語を知ることから、日本語を知って、日本語をとおしてナマな日本を知ること、知りつつ、徐々に、そしてはやがて……そんな気持ちが彼等の内部のどこかにうずいていなかったとは言いきれまい、そんな気がする。そんな心理とは別に、語学そのものの興味から日本語をやろうと思つて初めた連中もいたかも知れない。何れにしろ、その頃の二十代の青年がいまは六十代になっている。

ところで私のクラスに私よりも日本語がうまいのが二人いた。一人は盧觀偉、一人は廖夢醒。盧觀偉は私より四、五歳年長の言わば大学きつての秀才の一人で当時、学生でありながら社会学かの講師をやっていた。胸を病んで学校のキャンパスのなかに、自分の資力でつくった小屋に独りで住んでいた。賀川豊彦にも傾倒していた。あとで私が学校を引きあげるとき、私のつらい思いをして買った本などを買ってくれた。キリスト教のなんかの大会に中国代表でヨーロッパに行ったことなどをきいたり、中国との戦争のときに香港から悲痛熱烈な手紙を自分あてに書いてくれたが、無頼放浪の私はその大事な手紙もなくしてしまった。

廖夢醒は廖承志の実姉で、廖仲愷と何香凝の長女である。数年前北京から私たちの親友だった故司徒喬のウルムチ界限の画集と彼女自身の写真を送ってくれたが、文芸手帳にはさめておいたその写真も手帖ごと、どこかで酔ったはてになくしてしまった。

二人とも毎週のクラスには出なかったが、とびきり面倒な試験も百点だった。何しろ私よりもまともな日本語なのだから当り前だった。(この辺で本題の「賢治からもらった手紙」にもどらなけ

ればならない。)

沙基事件^{シャキ}(六月二十三日事件)のあおりを食って自分は大正十四年の七月、その船の名は忘れたが香港から日本に引き返した。同じ船にドイツから帰国する川喜多長政がのっていた。(また横道にそれるが、彼のことにも就いても一寸ふれたい。その後知ったことだが川喜多君は明治三十六年生れで私と同年輩、彼が府立四中から北京大学に入ったのも、私が嶺南大学へはいったのも、或いは同じ年だったかもしれない。彼の話によると北京で排日運動があまりさかんなのでドイツにとんだらしいが、当時としては日本の方が中国よりも教育は遙かにすすんでいたのに、言わば「後進国」に留学した事は変な話でもあるが、二人ともそれを悔いるどころか、いまでもよかったと思っている。)

東京にたどりついた私は九段下の黄瀛の下宿にしばらく居候していた。青島の日本人中学校の生徒だった彼から広州の大学生だった私あてに「君は中国人ですか、日本人ですか」という一節のある手紙をもらったことがある。それから彼との文通がはじまったのだが、東京駅での初対面の私を黄瀛は九段下の彼の下宿にひっぱっていった。

沙基事件^{シャキ}のあった広州沙基で私は詩誌「銅鑼」の第三号のガリ版きりをやった。六月二十三日直前の頃だったと思う。鉄筆で切り、ボタンボタン刷りも終ったが、とじるひまがなかったと思う。一とたばに重ねた半紙をトランクに入れて東京まで持って帰った。黄瀛も「銅鑼」の同人だった。彼と二人で表紙をとじて送りたいところへ送った。その前後である。正確には七月か八月にはいつてからだったか分らないが、多分は七月、私ははじめて宮沢賢治に手紙を書いた。(その前年の大正十三年の多分秋頃、私は初めて、心象スケッチ『春と修羅』を読んだ。読んで私は感動し

た。賢治に書いた手紙は内容はもう忘れてしまったが、骨子は銅鑼同人勧誘の要望だった。それにはすぐ返事がきたが、特徴のある筆蹟と不思議とも思える文面が自分にはひどく印象的だった。特にそのなかの「わたくしは詩人としては自信がありませんが、一個のサイエンティストとしては認めていただきたいと思います」といった一節は、四十数年もたつたいまでも憶えている。賢治は同人参加を承知し、一円の小為替と詩「風景」二篇とを同封して寄越した。

「……元来が不精で自分が出す手紙でも一ヶ月もポケットに入れたまま忘れていたりする私は、無論もらった手紙などはチャランポランなのだが、宮沢賢治の手紙だけは最初のから全部とっていた。……ところが前橋から福島に移転し、そして東京に落着くことになったのだが、東京での住所がはつきり決まらなかったもので、その手紙の東は福島の新田舎へおいてきた。それを何も知らない祖母は大掃除の時に焼いてしまった。いま私の手元に残っているのは、東京移住から後のものだけで八通しかない。彼の遺稿全部に眼をとおしても、詩についての感想はへそれ即ち決死のわざなり」という前後の三行しかない。私の前橋時代、彼は三回に亘って詩への鬱勃たる感想を手紙に書いてくれた。その紛失だけはいまでも実に残念でならない。……その後『銅鑼』は時々活字になったりもしたが、殆んど謄写刷りで三年位継続し、当時の詩壇の有力誌の一つでもあった。そして同人の個々の作品もいろいろ評判されたりしたが、宮沢賢治の詩に対しては、外部からはたった一つの批評をもきくことは出来なかった。（時間の有難さに就いて考えさせられるこれも一つの例だろう。）

わたくしはかなしさを

青い神話にしてまきちらしたけれども

小鳥らはそれを啄まなかつた

〔札幌市〕の一節

そんなへかなしきを彼は詩壇に対してもっていなかったろうか。恐らくもっていなかった。恐らくそうしたことは問題ではなかった。そしてまた私達にも、彼の詩が問題にならないことなど問題ではなく、ただ愛読していた。高村光太郎のアトリエで夜中の三時過ぎ頃『春と修羅』を二人でよみ合ったりしたのは、あれは一体いつ頃だったろうか。私達は時々出てくる洗練されたユーモアにひたくりあうようにしながら声を出して読んだことなど、それから度々の『春と修羅』をいま夢のように憶い出すのである。……」（心平「宮沢賢治覚書一」のA）『文学界』、昭和十年三月号、文圃堂刊）

以上の自分の文章で分ることは、昭和十年までは、賢治からの書簡を、少くとも八通だけは持っていたことになるが、現在はその一つをも持っていない。

私が嶺南大学の同窓で「南京国民政府宣伝部長」林柏生の招聘で南京に移住したのは昭和十五年の、多分九月だったが、その時賢治の書簡も全部南京にもっていった。外には高村光太郎からの書簡全部と、初期歷程の同人だった土方定一や逸見猶吉、尾形亀之助、中原中也等の手紙やハガキ類のうちのこれだと思うようなものや尾崎喜八また八木重吉の毛筆の手紙などももっていった。杉浦佐助（サイパンで死亡、高村光太郎の推挽で日動画廊——現在のサロン——で木彫展をひらいた）の南洋居住中につくった大蛙の木彫ももっていった。またその後、一時帰国したとき、光太郎から形見としてもらった智恵子さんの紙絵四点も瑯琊路十一号の自分のところにあった。

昭和二十年敗戦。私と家族は瑯琊路から金陵大学の近くの友人が住んでいた家（彼らが上海に移ったので）に移った。そこへ黄瀛がやってきてしばらく同居していたが、間もなく自分たちは南京城外の「日僑集中営」に、日本人居留民全部と共に移動したが、書簡は藏書類やその他と一緒に屋根裏においたままになっていた。その後黄瀛は名取洋之助が住んでいた家に移った。

いま考えるとまがぬけている。私は自分の藏書目録や住所録などは翌年四月、日本に持って帰っている。紙絵などはパネルからとりはずして目録のノートの中にはさめればよかったし、手紙類もなんとかなったかもしれない。しかも間ぬけなことには、藏書目録はその後なくしてしまっている。自分がもらった賢治の書簡類には文語体で書かれたものと口語体との二タ通りがあった。いずれも賢治の書体が署名なしでも分るように、その文面にも独自性があったために、いまでもそらんじている一節や二節があるし、上掲の文学界三月号にも二、三その書簡からの引用もあるので、最初にももらったときからのそれらを追想してみたい。

黄瀛の九段下の下宿を去ってからだだったが、賢治から蜜柑箱が一箇送られてきた。林檎箱だったかもしれない。そのどっちかだったことは慥かだが、あけて見ると中味は蜜柑でも林檎でもなく、童話集『注文の多い料理店』がぎっしりつまっていた。多分手紙の方があとにとどいた。知人にもあげて欲しいという文面だった。それらの本をだれにあげたかはいま思い出せない。またその後の自分の放浪無頼の生活から、自分自身『注文の多い料理店』は持っていない。賢治が「銅鑼」に詩を発表したのは昭和三年二月の第十三号の「氷質の冗談」が最後だった。第四号からそれまで賢治は何回も「銅鑼」に詩を出しているので、従って文通も相当あったにちがいないが、それらに関しては私はいま殆んど記憶がない。その年の九月、私は前橋に移転した。そしてしばらくは

新聞紙をチャブ台代りにした生活をしていたが、そんな或る日私は「コメービョウタノム」という電報を賢治あてに打った。その年の十月頃ではなかったかと思う。賢治の年譜によるとその年の「八月肋膜炎にかかり、父母の許に病臥した」とある。つまり病中に私のデンボウがまいこんだわけだが、賢治からは直ぐ手紙がきた。自分は目下親の庇護を受けている身分で、米一俵というわけにはいかない。で、本を別送するから、それを処分していくらかでもの足しにしてくれるように、という意味の文面だった。そして『造園学』の大冊がおくられてきた。

「コメービョウタノム」ということになったのは私の貧乏がひどかったことにもよるが、未知の人間にそんな甘え方をしたのは少しばかり理由があった。

賢治が羅須地人協会（昭和元年）をはじめてから間もなくの頃ではなかったろうかと思うが、賢治から北小路幻（森佐一——現在は森莊已池）を銅鑼同人にしてくれないかという意味の推薦の手紙をもらったことがある。そこで私は盛岡から上京していた北小路幻に会った。そして私は彼から賢治に関するエピソードをきいた。その結果、私のなかにひどく見当ちがいな賢治のイメエジが出来あがった。オルガンを弾いたり、ベエトウベンをきいたり、念仏を唱えたり、詩を書いたり劇をやったりの不思議な人物、まではよかったがアメリカ式の大農場を経営しているという錯覚までもでっちあげられた。自分は嶺南大学農学部のパイナップルの畑なども聯想し、新式の機械がモーターの音をたてながら土を掘っくり返す、そんな広大な耕地を想像した。その大農場とは、下根子桜でのちっちゃん開墾だったことが分ったのは、賢治の死後であった。昭和二年一月、父との諍いから大森八景坂の家を出奔した私は、花巻に行き「宮沢農場」で働かしてもらう積りだった。母は私に百円札を一枚くれた。詳しく書くとも面倒だから略すが、事態は急を要した。赤羽駅では時間表を

見たとき、兎も角一番早く東京を離れる汽車にのることに決めた。それは郡山廻りの新潟行きだった。で、その時はとんだ花巻行きになってしまったが、その後も「宮沢農場」は私を誘惑していた。そんな大農場の経営者なのだから、コメーピョウ位はねだっても大丈夫だと思ったのである。

「『……せきとたんが烈しく十数歩歩いてもついせき込んで坐つてしまふ』時でも『それでも工事（註・東北砕石工場のことと思われる。）から廻送してくる照会の返事や例の肥料の設計は時節ものなので毎日びしびしやらなければ』ならず、そんな具合で『詩といふ風のものはどうしてもまあよからうといふ気にもな』り『所謂文学人とおつきあひを私があくまでもいやがり、避け、冷淡であるのは、昔からこの考へが腹の底にあるためでもあり、も一つは、どうしてもこつちが芸術家でないためです』などと言っている（昭和六年の手紙）。事実、詩の催促のときなど、二つ返事で送ってくれたことも二、三回あったが、殆んどはいつもグズグズしていた。それが他のこと、例えば私が福島 of 田舎で土いじりをやるというようなことを言うと、まるで電報のような速さで肥料の設計なら自信があるから直ぐにもとんでいって援けるという意味の手紙を寄越してくれた。……」

（「文学界」昭和十年三月号「宮沢賢治覚書」の一部）

昭和四年の末頃、前橋を引きあげ、福島 of 郷里で百姓をやるうと思つたとき、そのことを賢治に手紙すると上述のような返事がきたのである。しかし大した面積でない田畑は小作人にまかしてあったので、実現しなかった。しかし昭和六年の七月私は、麻布十番で屋台のやきとり屋をはじめた。そして九月には屋台を新宿角筈の紀伊国屋裏に移したが、その頃のあるとき賢治から次のような手紙がきた。「……隣人は或は五錢で、つかれた筋肉や神経を癒やすでせうか。それは工夫のしやうで、もつとうまく有効に、もつとやすくできないでせうか。よき電気ブドウ酒ありとせば、私こそ

上手に合成いたし得るものです。黒豆の煮汁と酒石酸及び枸橼酸、砂糖及び蜂蜜の適量、葡萄エステル、右の混合物はほんものの葡萄酒と同じく疲労を去り、栄養を加へるでせう。……」

こんなに親切に教えてくれたのに、自分にはむずかし過ぎたのと、材料そのものを買い入れる余裕もなかったので実現出来なかったが、一本二銭のわがやきとりの味は、東京広しといえども比べものない程のものであったという自惚れはあった。光太郎と一緒に角筈の屋台に現われた智恵子さんがタレを見せてというので、タレを入れたカメを斜めにして見せると「おいしそうね」と言った。その言葉が発狂前に智恵子さんからきいたまともな言葉の最後だった。またその頃の或る日、新宿の聚楽？でビールをのみながら、賢治と当時南京にいた黄瀛とに寄せ書をしたことがある。その寄せ書への私宛の返事の積りだったのだろう。賢治はハガキの最後の方に「……高村光太郎氏にはまことに知遇を得たし。以て芸術に関する百千の疑問を解し得ば幸甚このことなり。……」とあった。「解し得ば幸甚このことなり」は幾分私の記憶に字句の間違いがありそうだが「……百千の疑問を」までの分は、はっきりその通りに書かれてあった。

昭和六年七月号の「詩神」に私は「宮沢賢治論」を書いたが、それに就いて賢治は感想を書きおくってきたが、その文面は記憶にない。只、フランスの大將などと比較されて恐縮、というような意味あいの一節があったように思う。フランスの大將とは、賢治を引立てる意でジャン・コクトウか誰かを引合いに出したように思う。けれどもその「宮沢賢治論」はいまのところどこにも見当たらないので確としたことは言えない。

やきとり屋をやりながら私は「サッコ・ヴァンゼッチの手紙」を抄訳し、溪文社から出版した。それを賢治に贈ると、(この訳書もいまは私自身も、持っていそうな当時の友人も持っていないの

で、その定価も忘れたが）手紙のなかに二円の小為替が同封してあった。それは「サッコ・ヴァンゼッチの手紙」の定価の恐らく倍か三倍位の金額だったと思うが、余分の金額は貴下の次著の為に予約せんというような意味の言葉が書かれてあった。その頃、つまり私が十二社に住んで新宿角筈に毎晩通っていた頃、詩誌「弩」^{いしゆみ}をガリ版ではじめた。（石川善助が私の二階に同居していた頃である。）光太郎は松の木板に太く堂々と「弩」の一字を彫ったのを屋台までとどけてくれた。（これも後年南京に持っていったままになってしまった。）

私は「弩」のために賢治に詩を依頼した。送ってくれたのは文語体の詩であった。それは多分定稿になった「文語詩稿」のなかの一篇で全集にも収録されているものと思われるが、そのどの一篇であったかは記憶してない。その頃自分はどっちかという血が逆流していたような時代で、送られてきた文語詩がどうも気に入らず、改めて別稿を依頼した。そして恐らくは賢治の返事が上掲の「……せきとたんが烈しく……」の「文学界」に引用した手紙ではなかったかと思われる。序でも少し「弩」にふれば、十二社の私の家でガリ版で刷り、光太郎の「弩」に墨汁をつけて表紙に押した。逸見猶吉と三野混沌と私の詩、各一篇ずつがその内容だったが、どの詩も本名の署名はつけず、ア、イ、ウと書いたような気がする。作者の署名などはどうでもいいと思ったからである。ところで私の、つまりウの「囊」という詩が刷りあがってから気に喰わず、五、六部だけをとじたまま、あとはつくることを断念してしまった。刷ったのは改良半紙という紙だったが、私の家の便所にその刷られた紙が高くつまれ、それがだんだんなくなっていくた。三野と逸見の詩には、いささか申訳なかったと、いまは考える。手伝ってくれた善助にも。詩誌「弩」はそのようにしてはじめられ、そのようにして終った。